

P. フルキエ著「公民の倫理—入門哲学講義」筑摩書房 1977年9月25日刊を読む

公民の倫理—入門哲学講義—結び

1. (1) 倫理とは、私達の生きようとする欲望を、それが起きる度に抑えつける、単なる禁止の規則集ではない。
(2) たしかに、無反省な衝動の場合に私達を制止することはあるだろうが、その場合も、真に人間的な生活の死に通ずる坂に、私達がさしかかってしまった場合だけである。
(3) 倫理とは、生の教えなのだ。
2. (1) 倫理は、私達をより豊かな生、より高い生へと招く。倫理は、自然のままでは私達の視力がとどまってしまう地平線を越えて、さらに広い地平を私達に示す。
(2) 倫理は理性ある魂により高い望みを意識させ、私達の視線を、他者へ、人類という大きな家族へ、と向けさせ、私達を、高次の理性、神自身の観点へと高め、利己主義的な楽しみという狭い円や、けちくさい心配から脱出させ、世界という広がりまで拡大させるのだ。
(3) ローマの詩人とともに、《私は人間である、人間に関することで、私に無縁なものは一つとしてない》(テレンチウス)と言える人にとって、人生は何と偉大であろう。
3. (1) このような心の拡大には、犠牲がともなわないわけではない。
(2) しかしどこに、すべての苦しみを免れた生が見出されるというのであろうか。少なくとも、義務の尊重、人間の尊厳の感情、同胞愛によって、いさぎよく同意された犠牲は、勇気をもった人々に百倍もの報いをもたらすだろう。
(3) 倫理的生活は、善と理想だけに心を遣い、自分の幸福のことはもう考えない人に、幸福を確実に与えてくれるのだ。
4. (1) だから、倫理を選ぶことによって、人生の最も美しいもの、少なくとも最も熱望されるものを断念するのだという印象を持って、諦めた人として人生の中に入って行ってしまうのはならない。
(2) それどころか、人間の行動についての崇高な考え、倫理の大原則に就こうとする固い決心は、多くの幻滅、多くの不孝に対して守ってくれるものであり、輝かしい日々、実り豊かな秋を約束するものだ。
5. (1) だからこそ、人生万歳。人生は、もし私達がよい面を見ることを知っていれば、美しいものなのだ。
(2) 人生には、障害があちこちにあるが、障害こそ、特に若い、情熱に燃えた心にとっては大きな魅力ではなかろうか。

<コメント>

フランスの高等学校「リセ」では、3年次に哲学の授業が正課として5～6時間、理系進学者にも3～4時間ある。本書は、その中学生版である「公民の倫理—入門哲学講義」のテキスト。フランスでは、中学で「哲学入門」として「倫理」の授業があり、高校3年では、本格的な哲学の授業が正課として組まれている。日本はようやく、「道徳」の授業が中学校で始まろうとしている。本格的な哲学教育の道は長く続く。

2019年3月8日(水)林明夫